

森林づくりと山暮らし

井上達男



白山連峰と高鷲スノーパーク; 鷲ヶ岳スキー場から

退職したら岐阜県郡上市の鷲ヶ岳山麓に建てたログハウスで山小屋生活を10月から始めようと準備を進めていた2012年、“本山寺山森林づくりの会”が6月に発足した。会はその後発展し活動も50回を迎えようとしている。森での作業に参加したいのだが遠くなってしまい、今はHome Page掲載作業をさせてもらっているだけだ。着実に整備されていく森林の姿を想像しながら機会を見つけて本山寺山を訪ねたいと思っている



雪の壁(2m)に囲まれた我が家 2015/1/4

暮らし始めて三度の冬を越した今、ようやく山賊らしい生活のリズムを掴んだように思っている。場所は鷲ヶ岳スキー場の南に広がる明野高原の別荘地だ。近くの町、白鳥から12km、標高900mにある。窓の向こうに白山連峰を毎日見ることができる。それで『HaksanView』と名付けた。スペルから“u”を外して固有名詞としている。「薪ストーブの傍で揺り椅子にくつろぎ一杯やっている時、ふと北を見ると夕暮れの白山がアーベントロ

ートに染まっている」という夢シーンをスケッチにして自分流のデザインで小屋を建てた。

悪友たちは買い物はどうする、医者はあるのかなどと生活の不自由さに加えて雪の心配をしてくれる。近くの町、北濃の白鳥まで車で15分、スーパー、ガソリンスタンド、コンビニ、病院、銀行、郵便局に役場もコンパクトにまとまっている。何をするにも待ち時間はない。田舎暮らし万歳だ。



暖かい薪ストーブと薪づくり

今年の冬は10年に一度の豪雪だったとか、2メートルを超える雪の壁に囲まれて越冬した。除雪に追われたが、日課としてスキーに通い、パウダースノーの森を思う存分滑降できた。国道と高速道路が雪で二度通行止めになったが、町が雪慣れしているのか生活道路は積るとすぐに除雪が終わり困ったことはなかった。加えて二度、半日強の停電があった。気温-15℃。近所に石油ストーブのみで生活している人があり、凍えそうなのでお招きした。停電でも我が家は薪ストーブで暖かい。ローソクの明かりで一杯やり、語らいを楽しみつつ電気が点くのを待った。

5月連休になってようやく庭の雪が消えた。あわてて野菜作りに花壇の整備、そして薪割にと忙しい一月が過ぎるともう梅雨に入ってしまった。豪雪の影響は新たに植えた庭木に打撃を与えた。リンゴ、梅、桃、杏子などの苗木が凍って沈む堅い根雪にことごとく幹から無残に折られてしまった。しかし、この地に自生しているナナカマド、山桜、クロモジなどの幼木は耐えた。雪解けとともに寝ていた幹が直立し瑞々しい新緑を見せている。



庭に出たウド

山の春は遅い、昨日やっと庭で山蕨を籠いっぱい採集した。鍋一杯の佃煮を妻が作ってくれた。これでご飯が進む。先日は近くの山に出かけリュック一杯の蕨にウド、タラの芽さらに姫タケ(スズ竹)の筍を持ち帰った。蕨はストーブの灰でアク抜きし、酢醤油で味付けした。近所に配ったのは勿論、関西の親戚にも宅配した。まだ冷蔵庫に山となっている。

山菜の一番手は蕨の茎、残雪が消えない4月初めから雪解けとともにつぎつぎに芽を出す。食事前に庭先で採ってきて食卓を賑わす。

コシアブラとコゴミが二番手だ。サッと湯通しして二杯酢で食べる。案外知られていないのがイラクサだ。葉の刺が痛いので軍手を二重にして採る。茎はグリーンアスパラに似た食感で美味しい。山菜が終わるころ、庭の小さな菜園にサラダ菜や春菊など葉物が育ってくる。梅雨が明けるとトマト、キュウリにズッキーニ、ナスといった、高原の気候で柔らかく腐葉土育ちで味が濃いものが採れる。

都会に住んで山に通った頃には野生動物に遭遇する機会が少なかった。だが今は一緒に住んでいる感覚だ。毎晩猪が空き地を掘り返す。蕨などの根や枯葉の下のミミズなどをあさる。翌朝にブルドーザーでやったのではないかと思えるほど掘り返された地面がその痕跡だ。幸い永住している我が家の庭は今のところ無事だ。しかしササユリが十数本が蕾を付けている。根は猪の好物なので心配している。骨粉の入った肥料を加えてユリやグラジオラスを植えたらタヌキの夫婦が早速掘り返してくれた。球根は食べていないので彼らは美味しいものにありつけなかったようだ。野ねずみは秋から冬に活躍する。雪の下にトンネルを自由に作って花壇に沢山通路を作る。チューリップやサフランなどの球根を食べる。春に待てど暮らせど芽の出ないチューリップに気付いた時は後の祭り。今年は50球ほど食べられてしまった。キツネとフクロウがネズミを捕食してくれる。どちらも夜に活躍している。テンは早朝に隣の山小屋のデッキで伸びをしているのと出会う。鹿はもちろん良く出没する。しかし、この地の主はカモシカだ。別荘地の端に植林された岩場混じりの急斜面がある。そこに居ついているらしく朝夕に庭の中や道路を歩いている。好奇心が強くそばまで寄ってもじっとこちらを見つめている。



庭先に現れるカモシカとアカゲラ

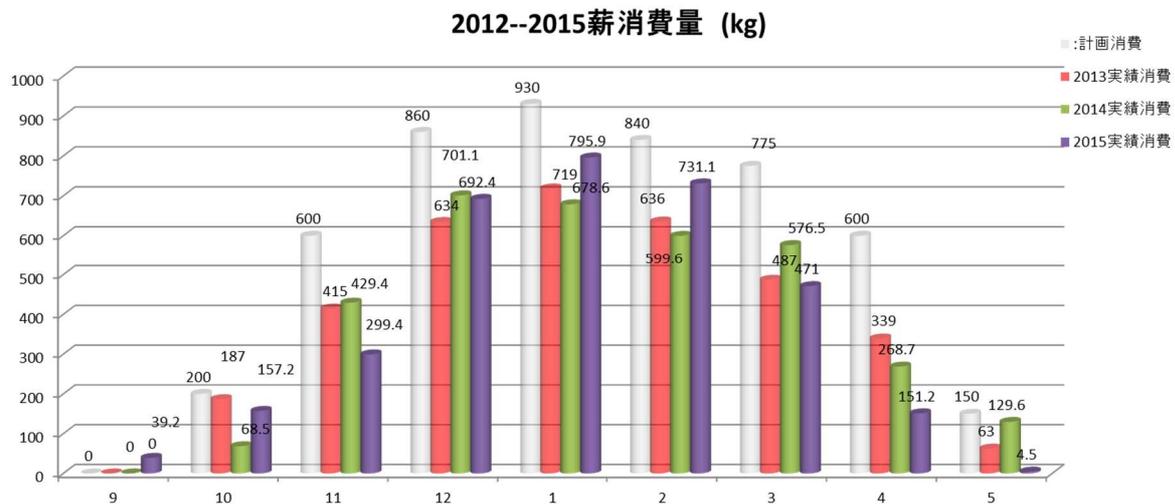
エゴの木があるが、コゲラが群れでやってきて実を啄む。晩秋まで実が枝先と地面にあるのでずっと通ってくる。アカゲラは高く伸びた松や檜の幹をけたたましくドラミングする。側の畑ではのんびり雉が歩く。朝は沢山の小鳥のさえずりを聞ける。ホトトギスは夜になっても”テッペンカケタカ”とけたたましい。

駐車場にマムシがとぐろを巻いていた。妻が車に乗ろうとして気づいて大きな悲鳴。大きな赤マムシだった。鳶口でコツンとやって道端に捨て置いた。鳶だろうか、銜えて飛び去った。シマヘビもヤマカガシも庭の蛙を追ってやってくる。土ガエルの大きなのが庭に居ついている。

今年はずいぶん収まったが、昨年は二年続いてマイマイ蛾が大量発生した。樺も檜も杉もすっかり葉を食い尽くされて実は全くならなかった。熊の餌が無くなり、昨年の秋から今年の春にかけて熊の目撃数が例年の数倍となった。残念ながら私は遭遇していないが、別荘地の幾人かが遭遇した。幸いけが人

は出ていない。

さて、せっかくの山暮らしだから、暖房は料理もできる薪ストーブだけで暮らしてみようと思った。ログハウスの間取で前述のコンセプトからストーブの位置と白山の見える窓の配置が最優先だった。ノルウェー製のクリーンバーン型薪ストーブを選んだ。曲がり無しの垂直二重煙突が二階の床と天井を貫いて約7.5mの高さで屋根上に伸びている。赤外線がログ全体を温めてくれる。排気ドラフトにより室内が負圧にならないように地下室から吸気している。台所の換気扇を回してもストーブから煙が室内に漏れることはない。特に寒い日、外気温-15℃、一日16時間で約35kgの薪を焚く。建坪32坪の二階建ログハウス全室が暖くなる。一階は20℃、二階の一番奥の部屋で15℃を保つことができる。10月中旬から5月連休まで180日間使用して3年平均で1シーズン約3.6tonの乾燥薪を消費している。生木に換算すると5.5ton程度になるうか。



薪の樹種は広葉樹を主とし、家屋の廃材も時々使う。檜、ミズナラ、樫、椎、桜、朴、樺、コシアブラ、樺などが薪として良い。なかでも檜がやっぱり具合がいい。火持ちが良く燃えやすい。ポイントは良く乾燥させることだ。針葉樹では杉の間伐材が入手しやすいが火持ちが悪い。松は高温で燃焼し、ストーブを痛めやすいし、煤が酷いので燃やさないようにしている。

薪ストーブの問題は薪の入手である。住いのある郡上市には薪ストーブ設置の奨励として設置補助金制度もあるが、割った薪の販売価格は石油ストーブと比較して石油代の1.5倍程度のコストと見積もっている。これでは別荘族が趣味でたまに使う程度なら良いだろうが、定住してシーズン中ずっと使用するには耐えがたい。真剣に普及させたいのなら石油コスト程度かそれ以下でなければならない。今のままでは導入する人は限定されてしまう。推進協議会にユーザーが入っていないのが業者寄りの発想になっているのではないかと。実際、地元で薪ストーブを使っている人に聞くと実家の山林から薪の原木を調達している場合が多い。原木を調達し自分で薪割するというのが結論だ。

私は送電線や道路などの掛り木処理をしている業者をお願いして原木を調達している。そこに至るまでにあちこち探してみた。ストーブ販売業者、薪専門店などから調達してみたが、コスト高であった。森林組合に掛け合ってみたところ、杉や檜を扱っていて広葉樹は滅多に手に入らないことが解った。現在コストを計算するとチェーンソーなどの投資を別として、16円/kg(乾燥薪)程度のコスト計算である。シ

ーズンコストは $3,600\text{kg} \times \text{¥}16 = \text{¥}57,600$ となる。夏場のエヤコンは不要なのでカーボンオフセットを実現し、石油と比べてコスト削減できている。



チェーンソーで玉切りし、斧で割っている。薪小屋を手作りして現在 20ton(生木換算)ほどの保管量となっている。2年間乾燥させると火付きが良く煤も少なく理想的なので三年かかってようやく在庫を持てるようになった。

薪づくりを通じて森林づくりに関心が高まっている。最近福井県総合グリーンセンター(坂井市丸岡町)を訪問した。1000種類超の樹木が植えられていると

言うので勉強になろうと思ったが、多くの樹種を一度見ただけでは頭に入るはずもない。木は幹に触れ、葉を手を持ち、花を見て、実を確認し、さらに薪にするとようやく”知る”レベルになる。”解る”や”出来る”レベルにはまだ先は長い。自宅の周りは奥美濃から飛騨にかけて広大な植林や自然林が広がっている。じっくり森林づくりについて学び体験していきたい。日本の森林で全くの Wilderness はまれにしか存在しない。そこは人間の手を加えるべきではないので自然に任せるエリアとして後世に残していきたい。一方、里山や山林は長年人の手で保全され活用されてきている。単に経済的規範のみで見ていくのでは

なく我々の価値ある文化資源としての存在を維持していくことにも力点を置いて森林づくりに関わっていききたいものだ。



そうそう、ストーブで焼くピザは天下一品、桜薪の香りや檜薪の香りが格別。本山寺山森林づくりの会の皆様、郡上市の林業視察を兼ねて HaksanView へお越しください。ストーブに火が入る 11月初旬がお勧めです。刻々と色づく紅葉と白山の初雪を眺めながらピザを肴に一杯やりませんか。

2015年6月記

注: 本稿は本山寺山森林づくりの会発行の「あかがし2号」に投稿したの